

でも強いという「ヘイドン」に日本の渡辺が大苦戦したのも覚えています。

もう一つ覚えていることは中菓人民共和国が参加していたことで、深紅のユニフォームで、台から少し離れたシェークハンドで、手首を強く使ってプッシュする打ち方ですが、あまり強くはない……しかし、この戦法をマスターすれば、大中国ゆえそのうち世界にのしてくるに違いない、と感じられました。

今考えてみると、日本選手は打つのにあまりに無駄な力を使い過ぎており、サッカーのごときフットワークが乱れがちだったようです。勿論、日本は男女共一位と記憶しているのですが……。

そして、強打の田中選手が荻村先輩と共に一九五七年か五年に西高に来て下さり、アクロバチックなゲームを見せて下さったことが、私の脳裏に残っています。

最後に、日本の卓球界も、高校生あたりに良き才能を持った者が多く、将来の強い日本卓球を願うと共に、西高卓球部の繁栄を祈りつつ筆を置かせていただきます。

## 楽しかった西高時代

十二期生 隅 田 献

西高生の時代は私の青春時代でした。卓球部の仲間と、又他の運動部の仲間と、そしてクラスの仲間と、いろいろなことを話し、遊び、悩み、苦しみ、そして笑いました。今にして思えば私の一生の中で、一番楽しかった懐かしい時代だったように思います。

私達の頃は、荻村先輩の全盛期で、何につけても荻村先輩と卓球日本が影響していました。私自身卓球を始めたのもそのうちです。又、当時卓球部の入部者が非常に多く、台も少ないこともあって、一年生の頃は台につける時間は非常に少ない状態でした。その為、練習に3回連続して休んだ人からほとんどん首にして数減らしをする始末でした。

又、荻村先輩も世界選手権の後でエキジビジョンに来校させ、私自身も一期上の高村先輩と組んで、ダブルスの手合せをさせて戴き、卓球生活のすばらしい思い出となりました。

私達の時は、内田先輩、加賀見先輩、浜田先輩、村田先輩等々の西高の黄金時代の方々がしばしば指導に来て下さいました。諸先輩の熱心な指導で、西高の選手のフォームはずば

らしいとよく誉められました。しかし試合では「人の良き」が災いしてか、良好な結果が得られず、又先輩の期待に応えられず、悔しい思いをした方が多かったように思います。

ここでわが同期のエピソードを二、三書いてみます。もう十五年も前のこと故、記憶に誤りがあるかも知れませんが。

まずA君。どちらかというとな勝負弱いチームの中で彼だけは強心臓の持主でした。当時、東京はN高の全盛時代で、層も厚く、インターハイには八人中四、五名の東京代表を出していました。予選の二回戦でN高の新人に当たったA君は、五・六点位勝つと急にN高の応援団に向って『何だ！ N高にこんな程度のもいるのか。やる丈ムダだよ』といったものです。そして、しばらくすると『こんな相手じゃ動く必要もない』といいきって真中に立ったまま、手だけ動かして試合を進めました。相手の選手は、A君の言葉ですっかり動揺し、二セット共テン半で自滅してしまいました。ところが、次の大会の予選で、そのN高の選手は見事東京代表となったのです。次にB君、杉並区民大会に、他の大会の都合で中杉・日大二高両チームが不参加となった為、優勝のチャンスがまわってきました。難関は、準決勝の国学院久我山戦で、これを前半二―一でリードし、希望が出てきました。当校のラストが新人の為、四番のB君に期待しました。B君は国学のエース渋谷選手に対し、大健闘良くセットオール後の、三セット目を一六〇九から一九〇九とリードし、勝利を確定的にしました。

私はほっとして水を飲みにいき、帰ってくると、何と一九〇一四と続行中。皆で懸命に激励し、盛んに間をとらせるもダメ。顔面蒼白で一九〇一四、ジュース後に遂にB君の負け。勝負はゲタをはくまでわからないとはこれだと悟りました。

最後にC君。C君は大会のダブルスで勝ち進み、四回戦でシードのS高組に当りました。これを勝てば次回はシードです。ゲームは大接戦で、セットオール。両方の組とも低い球をコーナーに決める為、再三に渡り、エッジボールとネットボールが起りました。三セット目も一点を争うゲームとなり、勝ち残りの審判が同じS高の人だったことから、もめはじめました。エッジボールが又出てきたのです。審判の判定も妙だったことから、言いあいが始まり、十九、二十でS高組リードから、又エッジボールでC君組の無念な負け。C君思わず『きたねえなあ』すかさずS高のF君『表へ出る』表へ出るとF君は、我等がC君の胸ぐらをムンズとつかんだ。いつもはケンカ早いC君、にらみつけるだけで両手は下げたまま。皆止めに入り、F君は捨てゼリフを残して去った。不思議に思つてC君に、何故手を出さなかったと聞いたら、『西高が出場停止になったら、皆試合に出れなくなるもんな』と。乱にいて治を忘れず、今でもC君に感謝しています。かくして、十二期の七人の光源氏と一人のクレオパトラは、その一人一人が書き切れぬ程のエピソードを残しながら、西高の校門を静かに去ったのであります。